類の多く、用途の複雑なる、其の研究には文獻の讀解批判に多大の困難を伴ひ、或點に至つては是非共、專門なる博物學的及び商品學的の智識と、之より生ずる第六感とが必要となつて來る。これ香料史學の必要を感ぜられ乍ら遂に放置されたる主なる理由であらう。吾人は今やこの好題目に對して、この好著者を得たるを喜ぶものである。（四六判、本文三九六頁、圖版十一、東洋堂發行、定價參圓五拾錢）（宮崎市定）

北宋全盛期の歷史

岡崎文夫校閲並導言吉田清治著

本書は昨年秋に出版されたもので今頃紹介するのは聊か時期を失した感がないでもない。それに宋代の歷史の專門家でも何でもない私がこれを批評するといふことも餘り當を得た話ではないかも知れぬ。にも拘らず事改めて本書を私がとり上げようとするのはこの本が「歷史」と銘打つてあるからなのだ。

我東洋史學界では所謂「研究」は脈程あるが「歷史」が書かれることは極めて少い。概說や講座の類はあつても堂々たる歷史は少い殊に支那の周圍の民族や國家の歷史でなく支那そのものゝ歷史となると一層鮮い。歷史が書かれないから從つて顯著な史觀に接することも殆んどないといつていい。少し誇張して言ふならば一體史觀らしい史觀があるのかどうかさへも怪しい樣な狀態である。かかる現狀の中にあつて本書ほとに角一家の史觀を持ち、一つの歷史として世に問ふた珍しい著述であるといへる。

唯一寸殘念なのは取り扱はれた時代が餘りに短いのと、も一つは著者がどこまで吉田氏であるかどこまでが岡崎博士たのか判然しない點である。併し固よりこんな事は大した問題ではなく、岡崎淸治といふ人が書いたのだと思つて置けばすむことだ。それよりもつと問題になるのは何故北宋全盛期が取り上げられたかといふことだが、この點に就いては別に說明がないから、特に重大な意義があるわけでなく何かの都合で北宋が擇ばれたのだと解して置くより仕方がなからう。

卷頭に岡崎博士の導言があり、十八頁に亘つて遠く漢より說き起し唐五代より宋にかけての大勢を簡明に述べ盡されてゐる。これによつて本文の北宋時代に至る迄の前後の脈絡は眞に遺憾なく會通してゐるといへる。後に續く時代に就いては、本文中に多少觸れてはあるが今少しく力を入れてあつたならば文字通り首尾一貫した立派なものになつただらうと思はれぬでもない。

さて本書は「歷史」と題されて居り著者もその積りで筆を進められた樣に看取される。それならば如何なるものを歷史だと考へて書かれたかといふ事になると多少はつきりしない。といふよりはそんなはつきりした觀念を持たずに叙述を進めて行かうといふのが著者の眞意かも知れぬ。けれども苟くもその史觀に興味を惹かれて本書を讀み出した者としては無理にでもそれを抽出しなければならぬ。

端的に言へば著者が本書に於て歷史と考へられたものは私に言

はせれば一種の「政術史」とでもいふべきものだと考へる。政術史といふ言葉がこの際適當かどうかは別として本書に取り扱はれてゐる所は極く廣い意味の政治史であり、著者の理想とする所は政術の興隆にあることだけは明かにいへると思ふ。政治史なるものを單に政治・外交・軍事・制度等の實際を述べれば事足れりせずその由て來る所を人間の思想にまで溯つて說き、延いては思想と實際の間隙や摩擦を調べ、之を國家興隆といふ理想の立場より價値判斷せんとするのが著者の態度であらう。

從つて本書は政治思想の推移を叙べる爲に必要なる限りに於て學術を說き文章を說き思想を說き、外敵に關する叙述もその限りに於てし、經濟や社會や制度も政術を說く爲に用ひられてゐる。政術に直接關係のない宗教や藝術は除外されてゐる。本書の態度としてはまことにさもあるべき所である。これ等の點からして私は著者は、私のいふ政術史の如きものを卽ち歷史也と考へて居られるのではないかと想像するのである。

但し以上は私が強いて著者の態度を觀念的に規定したものであつて實際の有り樣は必ずしもいふが如く論理的に排列されてゐるわけではない。むしろその反對にいはゞ小說の如く物語的に色々の事相が描寫されて行つてゐるといふ方が當つてゐるかも知れぬ北宋の政界――これも極く廣い意味での政界をいふので、一切の政治階級を含む人の集りとでもいふべきかも知れぬ――の動きを物語りの中心として話を進め、必要に應じて他の事相にも及ぶといつた叙述の方法である。この方法も歷史を一つの流れと解する著者としては極めて當然の方法であると思ふ。假に本書の如く物語の中心が唯一つでない場合であつてもかういふ表現法を取りたいものだと私はひそかに考へてゐる位である。

さて著者の史觀を私はどう考へるかといへば、歷史を一度も書いたことのない私は明確な批判の規準を持つてゐないので漠然とした空想的感想しかいへない立場にある。

さし當り私は本書に對して次の樣な懸念を抱くのだ。その一つは若し著者が、政術が人間に輕んじられ他の要素がより多く重んぜられる樣な時代を描かうとする時にもやはり飽くまで政術一點張りで押し通すかどうかといふ點である。もう一つは著者の理想はそのまゝ現代及び未來にまで延長し適用され得るかどうかである。我々は現代までに於て事實宗教や狹い意味の文化が政治よりも巾を利かした時代や社會のあることを知つてゐる。政治慾よりも物慾の方が強い民族をも知つてゐる。一體自分の住んでゐる時代や社會と異つた時代や社會の研究をする事の意義は、自分達が現在持つてゐるものと同じ種類のものをその對象に投射することにあるのではなくして、自分等と違つたものをそこに發見し、それによつて自分等の未來をより廣く深くするに資するといふ所にあるのではないかと私自身は考へてゐる。この私の注文に對しては本書は聊か窮屈な感なしとはいへぬ樣な氣がするのである。

以上著者の史觀に就いてばかり書いたがそれ以外で感じたことは著者の理解の强さである。著者は物事を輕々しく理解判斷しない。著者には感覺的な一定の規準があつてその規準に對應しない

事は理解した事にならない。而もその規準は仲々嚴格でありそれにあてはめる態度も強硬である。歴史事相に對するかゝる態度は歴史家にとつて最も重要な資格の一つだと思ふ。本書の文章がまことに讀み難いものであるにも拘らず最後まで人を引きづゝて行く力があるのは一つはかういふ點にあるのではないかと思ふ。

（A5版、昭和十六年十月三十日、弘文堂發行、定價參圓貳拾錢）

（内藤戊申）

ギリシア史研究 第一

原　隨　園著

本書はその再刊の序にも言はれてゐるやうに、昭和三年に一度出版されたものであるが、今回裝ひを新たにして再刻されるに至つたものである。十年前を知る人に向つては恐らく本書の價値なり内容なりを更めて紹介する必要はないであらう。併し本書が品切れとなり坊間でみること殆ど不可能となつてから既に幾年かを經てゐる。新しい學徒にして本書に未だ接し得なかつた人々の遺からざるを思ひ、ここに再刊されるに當つて、簡單な紹介を試みる次第である。

本書は十一篇の雄篇からなつてをり、最初の五篇、卽ち、一ギリシア史學の曙光、二、ヘロドトスの歴史、三、ツクュヂデスの史學について、四、ポルュビオスの史觀、五、時・運命…は希臘人の歴史意識の發展を叙述したものである。第一篇に於いて吾々は、地方的傳說が次第に民族的普遍的傳說に綜合され、地方的神話が統一的體系的神話に構成されて行く姿の中に、歴史意識たる「事實を求める心と、發展的綜合的把握」への萠芽を知る。第二篇より第五篇に至る迄に希臘史學の代表者は無論、その他の散文作家や抒情詩人の言說・詩歌を通じて、歴史意識の發展と、その希臘的特質とが、流麗精緻に展開されてゐるのをみるであらう。

歴史意識に就いて深い反省が要請されてゐる今日、正に世界の古典ともいふべき希臘人の諸作品を通じて考究された、その史學思想は、又吾々に多くの示唆を與へるであらう。

本書の第六篇より第十一篇に至る六篇は、一括してギリシアに於ける國家論の探求といへるであらう。哲學の根源はギリシアに發するとは最早知識人の常識である。わけても希臘的思索の中心的課題が國家問題に集中されたことも、今は多くの人が認めつつある所である。希臘哲學は希臘的國家思想を無視しては、本質的に理解されることはないであらう。吾々は本書第六篇「ギリシアに於ける理想國家論の樣式」、第七篇「ヘシオドスの『仕事』の一考察」、第八篇「アリストプハネスの喜劇『女の議會』について」、第九篇「理想國物語」、第十篇「ルュクルゴス傳說とその文化史的意義」、第十一篇「ソプヒストとその時代」に於いて、希臘人が如何に國家について「空想」したか、又現實社會を批判して、理想の國を或は「外國」に或は自己の「過去」に、又は現實の國家の「改革」に求めたかを知るであらう。常にポリス生活に基礎を置き、その政治性と離れ得なかつた希臘人にとつて、國家や法の問題は、特定